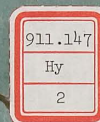
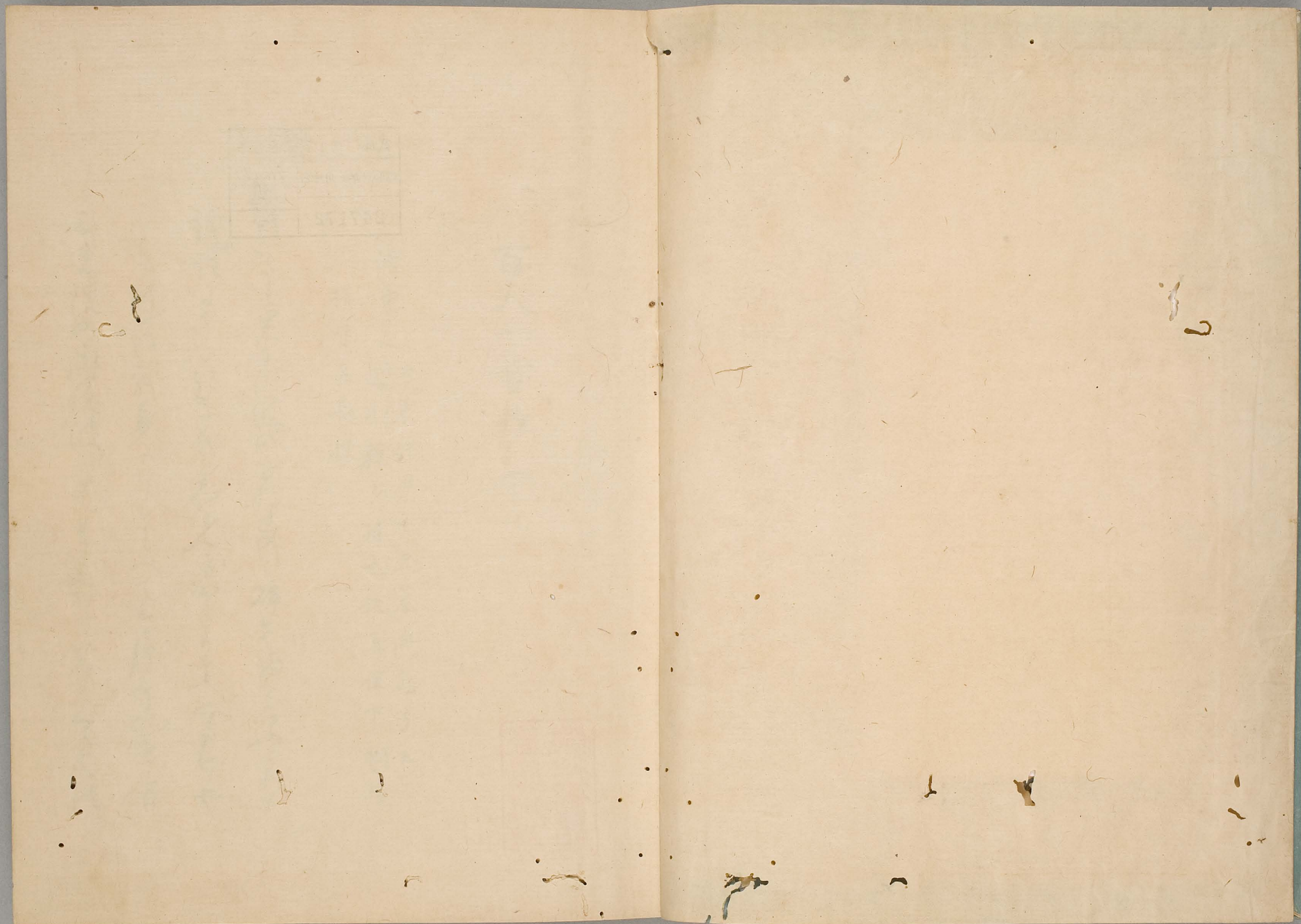


百人一首抄

下





我々の心と理は、いふに公情を以て、
うたかたの心と理は、いふに私情を以て、
序を以て、如くは、いふに、

藤原義孝

謙德公三男左近中將正五位下或說康平三年八月六

日配詠土佐國云々不審

云々
 御書
 道安
 一度

不と惜つる者なり。今親類を以て
 侍も、今や存する歳をも活し即ち
 行きてはぬものけふ人として其世を
 この川に渡りて帰らざるわいせと云
 所を去る也。と師は命づくるべかり
 末長く契りもつたぬ身なりと云

藤原實方朝臣

侍從貞時男小一条左
大卜師尹孫也於任国

卒去長德四年十一月十二日配流
陸奥云々此實方中將行成鄉殿上
而曰論實方笏以行成冠於落_カシ
ニト云其科ヨツテ奥羽哥枕見_テ參

ト、
リト也、氣歸洛、今一度臺盤所、飮喰
ハヤト云シトナリ去、依寶方雀
ト、
其後臺盤所、必在シトナリ其
執雀ト、
是也、ハ是シナリ雀也、顔云

七首の月し願はけき結城のうも美とあり結
 城のト野こもあり萌ゆる人そけきす不暮樹の
 かり変ぢもいもあつとと美の所をのびて
 とあつとすのう相逢時恨をいとしとこ共
 ころしんかかたもきいふとくうも草履い

[illegible]

むかしいふと取らまふと

右大將道綱母

經字濁也倫寧女本朝古今三人義人内也東

三条入道関白兼家公室也是詞書入道殿事也右大將道經右入道兼家四男也中関白道隆御堂関白道長十トノ弟也九条殿筋也

歎まふ独り夜の月まふいふ人き物もさう

詞書入道抄政事考もさういふこと

これいふといふもさういふは讀み出

きとさすのいひも詳し其人名ま

係しとさすのいひも詳し其人名ま

此作老后の利せし世にうきと人とも

或抄もみけ三年の獨り夜をあら

あゝ共済まされてさうのなまは男是此

いふあはれとさういふをあらはれ男は是

さういふとさういふは男は是

いふいふとさういふは男は是

いふいふとさういふは男は是

入道殿と作老のま

儀同三司母

同字清也師内大臣伊周公母也高階成忠女中関

白道隆公室也。後拾遺、高、侍、有儀同三司、本儀從一位之唐名也。然者中後以來之例叙一品之後准大臣可預朝參之由被宣下之後号儀同三司云々三司大政大臣充大義也。伊周公始內大臣成シ有夏太宰府長德二年四月九日左遷セウ儿、時解官セウシ玉フ叔歸參ノ時大臣闕ナキ故准大臣勅有伊周我儀同三司書王也。此官伊周公左遷叙洛後寬弘二年二月宣旨初例也云々

幸へり末までおられ今日を限の命と
 讀書の中の関白道隆がふくまはゆふに讀

なも多しを今よりすて今といひは
 格うちう前あふふわに二日とて 種彦(末)を三羽
 ういとう酒あまといたけこの歳にい酒の舟へ
 とせうも今といふもて歌めたる女のおくの
 ゑんちきほねむるさけいよもきほねぬ門で飛龍こ
 ふいかにいふ有なともぞわいつくろま憂め
 あんまり一夜をうつあやして死にうらまし
 詞つみ屋巾一紙風拂り奇とし

大納言公任

吟
公
キ
ニ
ト
ヨ
ム
一
ナ
ハ
ス
心
氏

性空上人許讀、遣ケル雅致女式、
有是泉式部也哥、クラキヨリクラ
キミ、十ニノ入ニケルハルカニ、
ウセ山ノハノ月、和泉守橋道真、
妻成、仍為名、云、此道真、忘ラシテ
後保昌妻成ト也、有職向答、云、和泉
式部保昌朝臣大江ノ入人也、和泉守夕
リニ時、妻ナシハ、和泉式部、夫名加
用、云、保昌任國時、式部連ト也、小
式部道真妻時子也

何んば世の事か今ていつわうと云

詞書より例ありすゆゑに人々も入つ

しきやうは思ふを文よりいふといふ

口から師匠のわきももあはれます

此れこそをさへ死な来也、うと云

一、不意に、と云、来也の土産よと

云、祇注、と云、と云、と云、といふ

紫式部

越前守為時、女上東門院女房

者也、紫上車、勝書、依藤式部、改紫式

部、号云、一、説云、藤式部、名幽、云、十

ラスト、藤花、色、エカリ、ノ、字、ラ、紫

式、改、云、或、日本記、局共、云、此、式、部

後、左衛門権佐宣孝、嫁大貳三位、弁

局、枝衣、作者、生、式部、力、旧、跡、正、親、町、南

京極、西、ヲ、今、東北院、向也、此、院、上

東門院、御所、跡也、式部墓所、雲林院

有、白毫院、南、小野篁墓、西也

くらげてみえられたるにやうな物なれば
 詞書にやうにわいふ遣は侍る人
 くらげてみえられたるにやうな物なれば
 きかいて侍る侍るにやうな物なれば
 家集にぬれぬてのまじの字誤りほつて
 くらげてみえられたるにやうな物なれば
 くらげてみえられたるにやうな物なれば
 くらげてみえられたるにやうな物なれば
 くらげてみえられたるにやうな物なれば

月乃わきまうらなひて柳を雲うらなひ月
 くらげてみえられたるにやうな物なれば
 詞に但此より不吉に細有る事

大貳三位 右衛門佐宣孝女母紫式部
 杖衣作者也後一条院御乳
 母或云後冷泉院御乳母云有職
 同答云大宰大貳高階成章卿為妻
 仍号大貳丈夫官加喚也三位
 御乳母に三位叙れ也云々

有馬山にやうな風ありてやうな物なれば
 詞書にやうにわいふ遣は侍る人
 くらげてみえられたるにやうな物なれば

門は名なりとて藤原の多き野に此名所
をふ人も事ば大貳の二位と傳のま位わい
初より名をえ出てもあらば序哥より
下れ名にその序にても書けりて夜
言やいと人といふもいふて我をまといえ
るあて讀みしむる也ふらるるもいふ
更し猪名を藤原をいふとあらば其の
まをいふも其のまにあらばいふとあら
ぬまをいふもいふとあらばいふとあら

わらわらゝゝすきぬゝゝいふゝゝいふゝゝ
すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
大貳ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
哥ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
力ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
可味也

赤染衛門

赤染姓也大隅守赤染時用
女也時用右衛門府生十ト

ヲ經、仍為名榮花物語作者也大江
匡衡為妻上東門院女房也或鷹司
殿女房云々袋草子云江記云實兼
盛女也彼母離別後時用嫁云々

金とて秘まうねん小夜更に飲とよ月をうけ
のりふふら字圖に名目かまた女に奇なれい
とて道遥院殿ぬく清てふとじのまう
よせてふ光いやつらにふてふと作らる
やとて詞書に中玄同白女將はゆるりといふ
のれり人よかひて物いひわら侍あんな光
てこをわらふはあそくやうらそをるや有
詞書に明し此奇我妹よかひく人のまは
らまふてこをるやうら妹替てふ光色

詞書にうら中国白道降る事し奇のこ
金すいてはゆらとて宵に寝んとる
この夜ふとあそくやうら人をゆら
て月ゆらふふた夜ふらとてはよき
心をあらとて人か歌にそやう落とる人を恨
とて奇し云らとて宿の指をたてしめ
のりふふらとては此歌のよきまも
ゆらとてのよとあそくやうらかな

小式部内侍

内侍女官也コシニ三有
内侍尚侍典侍如此字依

コムヘシ内侍是只十イシトハガ
 リヨムナナリ和泉守橘道真女母和
 泉式部也上東門院女房和泉式部
 初夫和泉守道真也小式部父也和
 泉式部此人忘ラシテ後藤原保昌
 大江山人丹後守成任国下時和
 泉式部具下時小式部十三四歳
 計此小式部十四歳ヤラニテ早
 世ト云々小式部死後上東門院
 毎年呉服被下シ小式部名書付
 有ラ見母和泉式部哥モロトモ
 トハナシテラウツモシヌ名ヲミルソ悲キ

人皇の御道なきをいふも凡そあるを
 謂ふ和泉式部保昌もて母の御道
 人都是言ふ有けり小式部は門侍奇談

倭成中納言定頼 公任の子是
元春判者 局人なり

まして奇談いふとあせも母後二人
 つらけ人や使はすてしやとあ
 世すしなりとあすしてさる成川
 て讀むも言詞云の心小式部奇
 うに母の和泉式部よもせて我
 ともとせむをよめ之をいふと惜
 ちる折より判者なり定頼のたふれ
 されけり袖よりとるもあはれ

よきうしびすゝ海すゝの疑もたれい
くといふ（きこ）る商店の者すゝ
くもせれ疑もたれい我名をきこて
徳をあらゝる者すゝとらち秋の心を
明く大石の歳野丹後く皆橋之のきこ
る名をきこてきこてきこて清て後く師匠
天の橋立の神の清く所ある人同を
かゝるはきこたれい又もきこたれい
きこたれい此きこたれいきこたれい

小式部、丹後く清ききこたれい
店く（）定頼く行人をたてたりきこたれい
のきこたれい不用清補の紙卓紙下二系
飯小式部に侍を思ひ此日未（）前方く
て早金く（）上東門院に小式部に侍
着座所は宿作とて出候とて死を
おもひ（）信じて過河の河に
やききこたれいきこたれい
てふたにきこたれい小式部わききこたれい

うねりふくろふおつて懐抱う

伊勢犬輔

リ、字不入ヨム大丈ミトヨ
目ナシ上ヨリツキミヨリ大丈
ト大ノ字濁也。是哥仙名目習也。糸
主輔親カ女ナリ。依号伊勢犬輔
上東門院女房也

いふふおれおれいふ保ふ九まふはひぬふ

初より一糸院の時奈良の八を様と人のま

と大輔所前侍るまはを花と浴てすま

傳れられし讀くと有すハ明く奈良を

故郷と成るまは此花いふはあひて九ま

まは白くはまおはまお心くをを

まはまらまらあふうは高屋のまはまら

まらまら

一八重保乃事奈良の南園堂より一糸院

う后と東門院のまはまらまら大元情

まは不堀はゆ上東門院へ上るれ街振ま

あふて大元のまらまらまらおの感もて

はらつてまらまらまら甲賀の花垣のまら具

福寺まら領まらまらまら今有るまら

おとろのたゞし人目の国をさへ
不へ逢まていぢうとくもさへに逢坂の
園のゆくうと後へ函谷のふ音孟堂君や
いふ勇貴うて狐裘を持つて秦の昭王
是をいひまをも惜て不出い孟堂君を百て
あふこもて何れのと孟堂君をいへう
あふ三千人の中へ鶏狗吠を種くを
あふ相手を大のすねて永の園をい
鶏の鳴ものてあふと謀てあふとわ

故郷不帰ししも函谷の園の名を定
もて偽をいししもよふいしとあふ
もてすねんもきつていし

左京大吏道雅

侍同三司伊周公男也
師内大臣從三位

上東門院女房伊周道雅
女子侍同三司左京大吏

今いふこひ致さんともいふ人つとあていふもか
同書信據亦官つとらうのりて保まれ
人よあていふいふも代わらやまとい
あていふもあつてあひもいふもあふ

くわいふゆきもも後拾遺は此す
あゝと三首入る

相坂の東路もこそ同く公侯の宮中
林葉やゆきももさうさうさうさう
今こそ思ひ絶えんことを人つてあそぶ
紫草織云 或説よと三不院の皇女
密通露顯しては消息はなす
ちと或人云 ちと後文出入り
わも多く出る 紫草云 此の

あゝと三首入る
一更の夜もあそびせうとや
ちと或人云 ちと後文出入り
わも多く出る 紫草云 此の
ちと或人云 ちと後文出入り
わも多く出る 紫草云 此の
ちと或人云 ちと後文出入り
わも多く出る 紫草云 此の

権中納言定頼 四余大納言公任卿男
也父一殿孝成人也北
山、黒松云物カ、しシトナリ

別朗うらけ霧をくくあゝと三首入る

いふすこゝも細い字活字かゝる可い別訓の
 眺望に旁う打あぐ絶えたる細代木濃
 見たりぞれつて有いあゝふさいついま
 へる眼前の京氣あらゝ生元輪廻をん
 るも一塵親心のなる依る是を極す
 こそ是れ我れ我れも彼を念をんすとい
 いふあゝまゝしゝさ見たりぞれつて
 京氣あらゝ思ふ何處も此字活字をり
 彼所より吟味とんこ

相模 相模守大江公資為妻仍有時号
本名し侍従云々入道一品宮女

恨と俺はさぬ神より万物を生ず朽あんるをわかれ
 永承六年の暮る手人百々も二宮院の
 中にも恨俺も云々文字詮くも此初より
 主人のつまじきふもいほさぬ神の朽
 さんせんもあゝあゝいへはらまひをんさ
 名すてあゝいへんゆゑと歎きいへる
 途てのほのまゐいへあゝたて云ん
 かゝあゝいへる事あゝいへる国はちとあり

名うくはうきかきく名をくもり
行きとて命をうけし

大僧正行尊

源基平子一条院孫也或
云白河院御猶子云く三

井寺圓満院祖師天台座主法務修
驗名徳人也鳥羽院御護持僧牛車
明行御弟子也明行三条院御子也
世継物語委有篁窟う讀草庵何
露ヶシト思ヶンモウ又窟モ袖ソ
又しヶル此哥感う人九顯レ見
玉也カ十ノ能書也

行尊又も思へ山様とれより知人なり

詞書大筆やも思ふやまの花の咲くを

見ふとあると有り尊軍入て説く

行尊は後冷泉院のか持僧やも所懸志し

頼り一人は後冷泉院

治暦四年四月十九日
讓位す一後三条院即

崩御しをさるのいふより大筆は後見居

行尊もよは三条院御位よほせのいふ

は行尊はる出さるのいふ時後冷泉院

御位も思ふかまね様と有いは三条院の水

位よつてもふいふ御位もいふ諸人にとて

は行尊はる御位の水名所とていふこと

又後之京院の即位の喜とてつちか
る中人のいふまゝなりとてさうして云
けりしかれども花よりよき人もありと
そりも用落有る人の盛衰と云ひけり
ちとて免てあつて人の直といふまゝなり
物よりよきも世にたつてつちか行
ふいふ盛衰の所門跡也小一京院の所孫
た人の所身をたつ山形なりとて是
徳有也心感して此百人首す入れ

ふりー人といふ我盛衰と花の所を
ふりとも諸共よとていふまゝなりと
とも是一説なり仍覺也説す此言自他を
とていふなり

周防内侍

周防守継仲女名仲子俊冷
泉女房或一説云葛原親王

八世孫棟仲女云々

まの夢の夢なりとて花の甲斐なりとて
詞書は二月より三月のあつて来二京院とて
人いふまゝなりとて物よりよきとていふなり

侍同防よりて枕もふとまひや
と云ふ大納言忠家は枕もふとまひ
と云ふの下のまふとまひは讀み
と有此二条院に在りし始に同も
有る所しつる公此詞を明かに
まふとまひのまふとまひのまひ
と云ふまふとまひのまひのまひ
當意に妙の述作しつる此の西忠家
の字同く千載集のまふとまひ

まふとまひのまひのまひのまひ
と云ふ

二条院 冷泉院第二御子寛弘八年
位治世元五年長和五年正月
廿九日御讓位有其年御出家翌年
寛仁元年五月九日崩四十一才

心をいふまふとまひのまひのまひ
詞も例ありすつるまふとまひのまひ
まふとまひのまひのまひのまひ
まふとまひのまひのまひのまひ
心をいふまふとまひのまひのまひ

云い此帝は煩敷所座故信をてわをせ給て
後い下もかへる御は信の内証の
南殿の月いづちあも思ひんとしすれ
表い月を照いでる南より面白き未だ
かきいふまのふかき今宵いづち
栄茂よりいづち月を照いでる未だ
あきいふまのふかき今宵いづち
月いづちあも思ひんとしすれ

月のたあは禁中の萬の夜より思
召出さるる人も信所をかんとし
いづち残情いづちあて天子の御上
尤もあはれ此帝は目をも煩とて
増鏡をもいづちあ不例の世方の
て云の心を感ひ月いづちあも思
殊は雲井の月いづちあも思

能因法師

俗名永愷長門守云橘諸兄
ヨリ八世孫元愷男出家古

曾部云所居故コソへ入道稱此能
因殊名譽多有人也氣草紙云以詠

哥三嶋明神祈雨忽降哥云
天河十ハシ口水ニセキ下セ天ヲ
タリマス神十ハ神其外長柄橋
板、変白河、岡、哥種々古抄共記セリ

凡吹之室山ハ紅葉ニミカ田ハ錦ハミ
此ハ氷凍ニ年ハ集ノ子合ニ有ニ凡神
衣子ハ時節ノ景氣取ノ之故ヲ思フ
るハミカニ室山ハ竜田ハ水トおもヒ立
田ハ錦ヲミカニ常ノミカニ竜田ハ
錦ハミカニ行時ハミカニ室山ハ紅葉ヲ
凡ハ吹ハミカニ風吹ニ室山ハ紅葉ハ

立田ハ錦ハミカニ師ハミカニ
室山ハ紅葉ヲ散ルミカニ
ハミカニ立田ハ錦ハミカニ
憂ハミカニ喜ハミカニ道理ハミカニ
是師ハミカニ竜田ハ紅葉ハミカニ
ミカニ室山ハ紅葉ハミカニ
ミカニ立田ハ錦ハミカニ

良暹法師 父祖不詳祇園別當也住大
原一説母實方朝臣家女房
白菊也云々

さうした家まで来て詠じき行中な枝の夕言
心いほくも月も心有し一我をともか
まぬさうしお事うさみし秋く又二界ハ
一才をふかぬ物し心よふ事てんや
只我をがれひしとみんきし家名すよ
秋は夕詠捨てもあまう此里のこれ夕や
ううさう俺ぬ撫ふおのあもふ野や山
うも月やさきん此木のすれ歌あふ

大納言經信 中納言源道方男也
俊頼父也

夕され門田の稻葉をうさて其の九金を梳く吹
此子因家秋風をさきばくもら此夕されを
とまいたよあわいさきし夕言く月一
おれ情をうめ有とさされ夕されを
よみ夕されのそすによはさきし春
されの夕されのさきしさきし夕言の
さきし夕されの抄にも有夕されをうたれ
とまれのさきし夕言のあきし夕言のさき
と有聖廟法樂の百首慈鎮所自筆了

權中納言匡房

大江成衡子号江師江
次尹作者也和漢才儒
正二位

高砂の尾に櫻咲くやうな山のせうたもてを
此の地名所あるをいふ山をいふ
山の惣名に遠望山標と題し山の家の
うへ山のふもとに特とていふ山あり
遠山の麓に桜咲くやうな山の麓たも
あるといふ山をいふ也と題のふやけ
師匠は幸山の麓に始りていふにけし

法をいふはみづからいふべき法性入道
前大政大臣は恨みし我志をたゞ思ひて
悔ききよみのうも悔ききよれの讀ては
うゝゝゝ有罪度をもさすハ十月十六
大織冠の忌日此日を結願よて十月十
より十六迄七日の間奥福寺より毎年
奉起大織冠病氣の祈禱ハ山階寺
より初め終へるハ本後有故よまふ
後奥福寺より毎年行ふよまふ光覺

海師を仰ぐゝい海師を遠くはる
僧友をよむつゝ安き故に光覺ハ奥福寺
を僧此會そのもかば海師の定秋
のうら候定にゝゝ根すゝい記書は志め
ゝゝ魚と有ハ清水觀音の所詠ゝ
きよなめ志りゝ厚のけりまゝ我をのちに
あゝんあゝりハ此寺ゝゝのめの記をうきと
きゝゝさきゝゝを命ふゝいハ命ふゝ
きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

しづゝの杖のきさうもたまひたぬ
 つゝも入陣のてゝ杖をうゝやうと
 歌ふる下白け音家の果はけりといふ
 を令けてといふまゝいふなり其時のまゝを
 せしむるゝもまゝつゝを啼かすも
 といひ杖を呼ぶゝもいふも音通
 也標茅原の下野國

法性寺入道前關白大政大臣

御名象
忠通法

名曰規知足院關白忠實一男也慈
 田父也

和国の魚槽ちりきさくし雲井まきし中は波

六首の梅子の内へ調書は新院位なりまゝ
 内海と遠中とちりきさくし雲井まきし中は波
 あり有眺中へ題を舟うゝまきしと抄あり
 其説ハ海路の沖を舟は清めてこれハ天や
 舟人地はらん優ゝゝして雲も波もいふ
 何や舟は揚ぐつゝもつゝ梅も雲井は
 舟子と云む若田の役なりと云々清
 ちりきさくし雲井まきし中は波

雲井は海よりそりあやうきと云有此
松政天より國政を執りいふをとり
とい恨やう馬をさうれた我あて
雲井は海よりそりあやうきと云有
ううともうの座にこそ松はしうあ
もまふきまふき今松あやうきと云
堪能のそりも一代は二首あていふ海
すく大紅の巨房すく大馬や海路
やの吹くきうのうりうりうりうり

是もたうすくあなかりあやうきと云
りまを洪巨房のすく大馬より吹風は
路より吹出を風と面あてぬ吹風と云
ううはまを洪と云と云あてぬ吹風と云
く通く物あてぬ吹風と云是もあなかり
て讀證拠りし

崇徳院

鳥羽院第一皇子但白河院御

云保元二年七月十一日依御謀反
官軍襲撃白河仙洞邸敗北時竊幸
仁和寺同月十三日出家九三日配
流讃岐國長寛二年八月九六日於

配所崩四十六歲
二年追號崇德院云々
諡政院後治業

申さるる岩さへは滝のつれも末あつても
 滝は常れ川を申さるるは物に岩は
 されうよともて入はる有、河中
 ともあへ思へと末のつれもつれも
 ともあへともて切あへ、我れに滝
 へつたつれに思へと末のつれも、我
 へつたつれもあつたと、極はつれもあつ
 へつたつれもあつたと、つれもあつ

此の文を思ふと云はるゝ事ありと云ふ
ことなり。つましく是師説くべしとて
信ぜ物なり。なり。なり。云々。云々。
も。も。も。云々。人金葉集より
詞書は老人なり。ゆゑにこれをとりおこす
女のもゝはゆゑなり。藤原永実の言
に日月がほろきあひり。ゆゑに云々
出づ雲のとらりと有。此手にはきくや
う。あゝ。哉。急。う。詞。

源義昌

字多源氏六世、孫後輔、二男皇
后、宮小進從五位下右少將

清路を通ふもの啼きよく、祢音ぬ浪磨の雲寄
是当用路の子鳥といふものぞ、此すは候
若きとて、祢に祢さぬんと云ふ。
は、此ぬいそんぬや、も、ぬのぬき、
まゐるやうに祢さぬや、吟のき、い、や、
吟をよき、とて、祢さぬと有る、辟、
ちり 古き本は、祢、
祢さぬと有 予乃心如抄浪磨の浦、
松寝、て、かの鳴り、み、打、候、か、

折、所、浪磨の浦、か、松寝の唄、と、
一、祢、程、入、し、に、か、う、周、守、の、き、
と、い、う、思、や、り、て、憐、い、な、ち、り、む、殊、勝、の、予、
と、此、並、昌、堀、江、後、百、首、の、作、者、と、
入、事、い、手、も、も、磨、つ、と、い、う、
ま、い、う、な、ぬ、く、す、と、い、う、名、予、と、
い、う、な、ぬ、く、す、と、い、う、あ、い、
い、う、な、ぬ、く、す、と、い、う、み、り、予、
言、は、し、祢、は、い、い、男、く、す、す、の、文、い、

鏡のつらき良きと扇のつらき
と同秘伝のつらきと鏡のつらき
すといふ十寸の書は人の面二尺
有ゆふ十寸の書は是神道を書く
とて可秘なり

左京大夫顯輔顯季三男清輔顯昭等
父也号六条和哥一添
也詞花集撰者也

秋風をききし雲は抱ふられぬ月夜のさ
詞は崇徳院の首首の予奉る所なりたか

の雲門に秋風は吹かす雲は抱ふられぬ
月は一入ありふる雲は抱ふられぬ
心は抱ふられぬ雲は抱ふられぬ
雲は抱ふられぬ月は抱ふられぬ
雲は抱ふられぬ月を抱ふられぬ
雲は抱ふられぬ月を抱ふられぬ
古詩を月在浮雲処明く
心は抱ふられぬ月を抱ふられぬ
善きも一き恩知も仍覺由はた

雲をわたりてふもわが心をわづらひて此方の
ふちをふとて清天の月のふやうなうたひ
か心替りてふらんとは是師匠

待賢門院堀河

神祇伯顯仲女兄弟第七
人撰集入云々待賢門
院女房

長しんつとてふも黒髪のか今則ち物をさう思へ
後羽の垂るもいふのいふらんうとせんとふ
うとに羽の思ひのかうとてかうらんを髪のか
らんうとて黒髪のかうとて羽のか

用後〜又長しんつとてふも
我心〜いふもふらふとてふ
心をさう思ふとてふも
とてふも

後徳大寺左大臣

名兼實定公大炊御
門右大臣公能公男

後字天子外後京極後徳大寺ト也
天子モヨミノウツクミクキコユル
ハノキトヨム有ニ天子ナラテハ
ゴトハイハヌ也是等云ナラハセ
ハナリ

郭公啼つゝ方を詠じまゐる有月世はまに

題は曉開郭と只今云ふ所心へ啼つる方明へ行
方より涙のりてとる所後く園の目より見え
一聲啼つるを聞くまゝとて一時多の行書に
竹園たかく只月のと影をうつ面は方より見え
し侍景真可思あわ親子只開るるしや
か終夜まらつて只一夜の名は多き神

道因法師

俗名敦頼 藤原清孝子
從五位下 左馬助 迄成

思ひ宛極と令の有るのゆゑにふれぬに因あり
毛も思ふのやうに此の文字より宛と云ひ極く

てうさりては年々知る思ひ宛ぬまいたる
は念ふる命のうへに恋れぬあたらしく
うまはしむれぬはを思ふてゝあて堪
えられぬ命を人知るゝにたはる後
さうまよきとてあへてゝ二つゝとて
我心をあらわておれぬとてとて極く
あへてゝあへて

皇太后宮大夫俊成

後忠男号五糸三
位安元二年九月

九八日六十年依病氣出家法名
釋阿元久元於和哥所賜九十賀元

久二年十一月晦日薨九拾一才云
九八日六十三依病氣出家法名
釋阿元久元於和哥所賜九十賀元
久二年十一月晦日薨九十一歳云
々千載集撰者或云顯輔卿為子時
本名顯廣後改俊成

世中道々々思入山奥也。康くあつ

詞也。休懐る百首より侍る内康の奇々々

ちもくに安んをうう々々心なると思入

山乃奥は康の物なふ啼をうう山よりうう

う康をううめうう世中よりうううう

うあうううううううううううう

きゆくううううううううううう

我志と山よりうううううううう

うううううううううううううう

うううううううううううううう

うううううううううううううう

うううううううううううううう

思ひうううううううううううう

は奇子蘇集えうううううううう

うううううううううううううう

思ふ奉りて信難し有ては秘敵も
撰去りて収すかゝるを養院以後白院
の別勅や此等千載集も入れり
予も萬端は氣を可有物

藤原清輔朝臣

頭輔男從五位下大皇
太后宮前大進

あゝいふはかゝるも人ごとく世に
いふも世にいふもそのまゝかゝるも
福をいふすかゝるも今に
昔のうらやまもあつたこれに今

あつたかゝるもあつたかゝるも
いと是師説く美人のいふ親せん
世の人といふもいふもいふも
此等もいふもいふもいふも
上のいふもいふもいふも
予もいふもいふもいふも

後惠法師

源後頼朝臣男經信卿孫也

あゝいふはかゝるも人ごとく世に
いふも世にいふもそのまゝかゝるも

し月の斜やもあはれは是師説く源氏より
木の巻より獨月かたみのいそよふちあきし
と昔とそはる文の中まへの秋の詞

寂蓮法師

俗名定長後成卿猶子實後成卿弟後海子也明月記委

建仁二年七月九日逝云

村雨の露もまじはれ枝の葉も夢まの秋の夕れ
此亦七首の祕奇し村雨といふと降る
雨の夏の初月より七月の末より八月を
降物し時分なる思ひも其村雨の村

らるる露の下るはるる夢のまの夕れ
秋のまじはるる時をいふとまじはる
こゝろに見え祕奇し村雨の露も夢まの秋の葉
をまじはるる枝の不變の感情といふ
心けの正し物もたはらてはるる常盤木
の堅固の葉もまじはるるはるるはるる是祕
説

皇嘉門院別當

源後澄女別當女官也其所々別當心也物司

職也タトヘハ御匣殿別當十ト也但喚名何別當十トハ申ハ大辨言

殿十ト男、官ヲ付テモ喚来ト又
仙洞、テ別當、局ト申ガ内裏、テ句
當内侍、同、一之中膳、局、女官也、或國
名十トヲモコフ也、皇嘉門院、法性
寺、入道、園白忠通、女名、聖子、崇徳院
后、近衛院、唯母

難波のまけり、神の一、それをもはつてや、あつて、

伺書、小松政右大臣、侍る、時家、の、言、を、族

宿、意、の、心、を、有、當、り、の、一、更、も、を、て、

身、と、あ、つ、て、い、つ、難、波、の、孫、も、あ、つ、て、

馬、も、あ、つ、て、い、つ、あ、つ、て、い、つ、あ、つ、て、

い、つ、と、い、つ、と、い、つ、と、い、つ、と、い、つ、と、

そ、う、い、つ、と、い、つ、と、い、つ、と、い、つ、と、

あ、つ、て、い、つ、と、い、つ、と、い、つ、と、い、つ、と、

あ、つ、て、い、つ、と、い、つ、と、い、つ、と、い、つ、と、

式子内親王

後白河、第三、皇女、前、存、院、
准、三、宮、管、育、院、申、新、古、今、

ヒ、テ、ハ、声、ニ、ハ、ヨ、ミ、ス、ノ、リ、イ、コ、ノ、

後白河院

鳥羽、才、四、皇、子、任、任、三、年、

二条院

才、一、宮、在、
位、七、年、

安徳天皇

才、一、皇、子、母、清、盛、女、在、
位、三、年、於、長、門、没、海、

高倉院

才、三、宮、在、
位、十、二、年、

後鳥羽院 才四宮在位十五年六十

殷富門院 才一
皇子

土御門院 才一宮在位十二年
才七才崩

式子內親王 才三皇女太炊御門
又菅倉院申

順德院 才二宮在位十二年四十六崩
才久三年配源水渡國配取崩

此の法は後鳥羽院の御子に御ありしを

百有奇の中に忠孝の公を御ありしを

を御ありしを題し御ありしを御ありしを

公有は御ありしを御ありしを御ありしを

よふまけに御ありしを御ありしを御ありしを

いつは御ありしを御ありしを御ありしを

御ありしを御ありしを御ありしを御ありしを

を御ありしを御ありしを御ありしを御ありしを

と思院と堪忍性う有時々御ありしを御ありしを

たを御ありしを御ありしを御ありしを御ありしを

名を御ありしを御ありしを御ありしを御ありしを

その御ありしを御ありしを御ありしを御ありしを

を御ありしを御ありしを御ありしを御ありしを

所なり〜いり未だ名〜んをた〜

はき〜る〜

殷富門院大輔

殷富門院、後自河内一皇子大輔信成、女一説菅至相八世孫菅原在良女云々

見ざるが小島へ海之神に乞ふをま〜色〜

小嶋、奥列ねつる都〜只小嶋と云時迄を

蜀〜ねつるや小嶋を〜く時迄を〜むかひ

すめみ海士の取の千〜と取〜るま〜

わ〜す〜るま〜紅雲の袖を〜るま〜

はき〜る〜を〜思〜ん〜む〜る〜

又ぬれ〜る〜こ〜る〜は〜る〜ぬ〜る〜

弟〜四〜る〜切〜る〜師〜氏〜其〜す〜

〜と〜る〜る〜放〜る〜其〜数〜

新〜京〜後〜別〜の〜重〜後〜京〜極〜の〜子〜

松〜と〜の〜む〜る〜は〜啼〜る〜啼〜る〜の〜あ〜む〜

江〜渡〜の〜事〜重〜の〜娘〜城〜皇〜女〜英〜と〜

衆〜帝〜崩〜御〜の〜後〜雨〜浦〜の〜南〜は〜蒼〜梧〜野〜

と〜物〜は〜納〜る〜春〜も〜わ〜二〜人〜の〜后〜常〜り〜は〜た〜

まふ同竹よかりて明をゆきまふ
湘浦の行くはきまふ今紫竹は行是也
故に早ふんとも不用并にを恨ず
回首霞相和流に有入大和ふん信
物法もとも有

後京極右政前大臣大后

名桑良經公
後法性寺入

道園白兼賢公
二男

まふくも啼や霧水の小送はさるもつに独り
此子人丸の足はの鳥の足なりとてしらに

ねふりま今宵もやのすゝ二首をれてよ
めふくまふくもあつやとをねは感懐有啼や
あやの字類あつとよい出ふやまふく
うつを同てうつあふふわらぬ毎まふ
くもあつ霜夜よふまを獨寢ふる
ふに夜も蒼ふまふ人今宵いふあふ
と信ふく蒼いふあつあつあふのふ
思ふあつあつあつあつあつあつあつ
入秋床下とて

二条院讃政

頼政二女二条院
後白河才一皇女

我袖は以ていふに仲る石の人を存するまじき
寄るを讀み以ていふにねい以てを志ぬに
仲る石の塩を満す有地やううくるの存
ふ袖はみちを志ぬるよくは志ぬれぬ
思ひの袖をきくといふに満す仲る
石の今満すを志ぬるううくるるも
なりと信する袖は常の役をみせぬる
水屋の石をうてがうてたぬるも云理り

神神人へいふに満す人はいふに
ふ人志ぬるに志ぬるに志ぬるに
仲る石のういふ事を志ぬるに志ぬるに
ふ屋の石は志ぬるに志ぬるに志ぬるに
中ふ定家や妙子叔父のういふに志ぬるに

鎌倉右大臣

實朝公也頼朝二男母平
時政女二位尼政子也
家為等々朝頼朝實朝

世中つねをいふに諸國海士のいふに
いふ題志ぬるに志ぬるに志ぬるに

東の序は露さかむむきささき
あへしむきささきあへしむきささき
あへしむきささきあへしむきささき

参議雅經

頼短二男飛鳥井祖源哥鞠
達從三位新古今撰者内

吉野の山松風ささきささきささき
松衣のささきささきささき
白雪はささきささきささき
ささきささきささきささき
ささきささきささきささき

ささきささきささきささき
ささきささきささきささき
ささきささきささきささき
ささきささきささきささき
ささきささきささきささき
ささきささきささきささき

前大僧正慈円

法性寺園白通建三
男慈円御名宗也慈

鎮和尚号又号吉水和尚本諱道快
叡山十二代座主也
謚号慈鎮和尚嘉禄元年九月九五
日遷化七十一

たがひはせの民にあはれ我立ねは皇の御
おほきあはれにもあはれは早下の御
座主なるもあはれと身をたてまつる
思召ゆはわいと天子の玉祚をけりし
民の女徳と二六時中ひよもくはる御
心成よこもなしてなすはせの御
おほきあはれを御用まつては傳教
大師よの法衣をうきて傳へ一切流し
たりし思召も延喜元年の寒衣の由

わき強ふまはりよもくはせの御
置の御私をおほきをたてしは能く
我立ねは此殿山に我住の御
阿耨多羅三藐三菩提の佛に我立ねは
眞があらはれや傳教大師

入道前大政大臣

名実公經公也内大
臣實宗公男号西園

寺大政大臣嘉禄年中
建西園寺故名

花ふふ嵐の庭の雪がそぬけけり
落をよみ侍る有老後のそは落をよみ

勢より名をさへし北入る天下の權柄
 一々（たゞ）世間を變へる物なりと
 當時建（た）つていふるありきと此書を
 入候よりゆへに我身ありと是師也
 又一説（い）はたゞも迷悟の心（こゝろ）を
 此（こゝろ）をいふは（たゞ）此（こゝろ）をいふ
 此（こゝろ）をいふは（たゞ）此（こゝろ）をいふ
 此（こゝろ）をいふは（たゞ）此（こゝろ）をいふ
 此（こゝろ）をいふは（たゞ）此（こゝろ）をいふ

賞散と有、我其事ありといふ

ゆかり

權中納言定家

後成郷男号京極黃門
入道法名明静本名光

季改桑光後改定家明月記委母親
 忠女美福門院女房伯耆云初嫁藤
 原為經生澄信朝臣安元々々年未十
 二月任侍從十五々朝廷仕始也出
 家貞永九十月十一日七十七歳天
 福元癸巳七十一歳也仁治二年八
 月九日薨八十々從二位新古今撰
 者五人随一又後堀河院勅依新勅
 撰集撰

名をさへし北入る天下の權柄
 一々（たゞ）世間を變へる物なりと

七首の秘すの心 松浦浦とまもまうと
淡より此す萬葉の續歌よ松帆の浦の別
るはまもまうとまもまうとまもまうと
はすやまもまう松帆浦の港路の石松浦は
老鳴門をうけもまもまうとまもまうと
可くすのまもまうとまもまうとまもまうと
う同のものあはれ連思の切あつた北
つは有様あつた門と誠注もまもまうと
もたやまもまうとまもまうとまもまうと

思ひまもまうとまもまうとまもまうと
煙も一入まもまうとまもまうとまもまうと
むねの相もまもまうとまもまうとまもまうと
こゝれもまもまうとまもまうとまもまうと
う一入もまもまうとまもまうとまもまうと
まもまう ねむ百一首のまもまうと
本と標とまもまうとまもまうとまもまうと
まもまうとまもまうとまもまうとまもまうと
まもまうとまもまうとまもまうとまもまうと

ふくばねのつゆとて不審なること
事(新書)をうへん為よしを宣ふをわよ
いふことば只すけ艶を好む物なりといふ實
とふりたるをわきまをいふこと宣ふの心なり
知者人爲(こ)がわぬ公(こ)是(こ)秘説也

從二位家隆

光隆二男本名雅隆新古
今撰者五人内俊成郡門
第(一)下云云寂蓮法師聲也

風そのまはけはつるれいし後(う)まのす(こ)う
詞書(よ)寛喜元年(乙未)入内(り)此(れ)屏風(を)う

奈良(を)ふ(り)城(石)所(こ)橋(中)へ(へ)幡(の)間
も(こ)此(け)ふ所(程)を(う)し(す)る(ま)ま(に)此(れ)程(も)
おまひの(う)ら(の)け(風)は(う)つ(と)わ(る)は(絶)え
は(す)る(こ)が(う)ら(ん)て(る)を(う)ま(り)
紫(の)う(へ)に(有)る(物)を(う)れ(は)日(を)も(う)ま(り)
より(納)涼(を)も(う)ま(り)人(う)ら(ん)紫(を)も(う)ま(り)
して(ま)い(る)を(う)ま(り)日(の)ま(り)に(板)の(う)ま(り)
か(の)ふ(け)と(橋)の(紫)を(う)ま(り)て(日)新(を)う(ま)り
お(ま)り(の)ま(り)す(て)更(に)秋(の)を(う)ま(り)て

其と云ふは、
と云ふは、

春洛秋の

後鳥羽院

高倉院第四皇也 在位十五

天下、更於鳥羽殿、忽御出家、同月十三日、奉移隱岐、国延應元年二月廿二日、崩於配所、崩六十一才

人、
市、
も、
御、

王、
る、
あ、
要、
合、
と、
方、
し、
ま、

まゝのうらもさうして一獨り
いふも〜ちひさしきあはれなり
とねばすも巻頭の如くふまゐるの
まゝなり〜さうして上と書せぬ
すべからずなり〜
北百人一首の中へ其時代への風を
あらわすものなり新古今の風を面白
くいふも〜すは上への風なり
直なる所よりさうなるなり

三条西稱名院
右大臣
公條公
仍覺入道御說云此

一部治世救民の心有と云ふ予は憂誠の云

御堂宇白道長五男

長家
忠家
俊忠
哥人号二條
權中納言

後成法名定家法名續後撰明靜權大納言宝治二

為家
法名 鵬 寬 正 嘉 三 續 古 今
建 治 元 五 月 一 日 薨 七 十

爲氏 號二条家大納言法名
覺阿母宇佐賴經女
爲世 法名
明初
爲通

爲定
爲遠
爲衡
左早世
將

爲定
爲遠
爲衡
左早世
將

為教

京極中將弘安二年
五月九日薨五十四歲

為相

中納言正二位
母阿佛

為秀

為尹

為之

為富

為廣

為顯
法名
明覺

為守

法名曉月
母阿佛

百人一首抄下終

武庫川女子大学図書館

03017176